

## 資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1990-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008665">http://hdl.handle.net/2344/00008665</a>

# 「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

The World Bank, Sub-Saharan Africa : From Crisis to Sustainable Growth, Washington D.C., 1989, 300p.

世銀は、サハラ以南のアフリカに対して構造調整政策を推進してきたが、予期に反して短期的には、ほとんどその効果が経済発展の回復という形では現われておらず、経済危機は去っていない。このためアフリカ諸国からIMF/世銀の処方箋の適切さに疑問が出され、ECAからも代替案としての報告書が提出された。本書はこのような背景のもとに、力点を短期的な調整政策から、より長期的な発展の方策に移し、持続し得る発展のためには何が必要かを提示した世銀の新しい報告書である。本書の作成は世銀スタッフによるが、アフリカ人研究者、民間企業家、政府公務員ならびに援助機関担当者らの意見聴取を積極的に行なったことが記されている。

持続可能な(sustainable)発展のための提言として、本書はとくに、能力開発(capacity building)を強調する。アフリカに必要なのはより小さい政府であるだけでなく、よりよい政府であるとして、行政能力と信頼性の確保を前面に揚げ、人間に対する投資、すなわち教育と保健衛生、家族計画などにより多額の投資を求めている。90年代の戦略的目標として以下のものがあげられる。(1)調整計画を社会的影響を考慮しながら進める。(2)人材開発と基本的欲求充足を優先する。(3)能力開発を政府のあらゆる水準の機構改革を通じて推進する。また民間、非政府機関、女性がその能力を最大限に発揮できるようにする。(4)民間投資を促進する環境を政策的に創出する。(5)弱体な農業生産、人口急増、環境破壊の悪循環を断ち切るため農業研究、普及

活動を強化する。(6)現実的な地域統合と地域間協力を進める。(7)アフリカに対する特別援助プログラムを継続する。本書はこれらの問題解決に一つの答えはなく、多くの観点が必要で、それには全世界的協調体制がつくられねばならないと結んでいる。(吉田昌夫)

The World Bank and the UNDP: Africa's Adjustment and Growth in the 1980s, Washington D.C., 1989, 38p.

ジェイコックス世銀副総裁(アフリカ地域担当)は、本書の前書きで「この報告は1980年代サブサハラ・アフリカの経済実績に関して新しい視角を提示している」と述べている。80年代初頭の「飢餓ブーム」以降、経済不振の代名詞のように考えられていたアフリカ諸国は、実は80年代後半に良好な経済パフォーマンスを示していた、との本書の統計的裏づけに基づいた指摘は、確かに斬新である。

本書では、豊富なマクロ統計に基づいて、第2章で最近のアフリカ諸国の経済実績が紹介された後、第3章では対外環境および貿易について、第4章では資金フローと債務について、それぞれ近年のアフリカをめぐる状況が説明される。そして次に、最近特に構造調整融資との関連で問題となっているポリシー・リフォームに関して、第5章では改革の内容が、第6章ではその経済的影響が評価されている。

本書で示される統計からは、80年代におけるアフリカ諸国の貿易の条件は他の途上国と比較して悪いものではなかったこと、資金フローについても特にODAを中心とした流入があったこと、が分かる。アフリカの危機の主たる原因は国内的な問題である、との主張が本書ではなされている。そのうえで、80年代を通じて

世銀およびIMFの手で進められてきたポリシー・リフォームを自ら評価し、抜本的な政策見直しを行なった国が政策見直しを行なわなかった国に比べて、80年代後半の経済パフォーマンスが良好であったと主張している。

本書は近年のアフリカ諸国の経済実績を総覧するためのさまざまなマクロデータを提示しており、その点で有益である。また、貿易や資金フローの統計に基づいて、経済危機要因をむしろ内的な（構造的な）ものに求める本書の主張は説得的である。しかし、政策見直しと経済成長とを直接的に結びつけて評価しようとする点は疑問である。たとえば、政策見直しを受け入れた国が、そうでない国に比べ資金利用の面で圧倒的に有利であった事実を考えれば、これらの国の経済成長の原因を政策見直しにのみ帰すことが妥当とは思えない。

（武内進一）

---

ジョン・アイリフ著、北川勝彦訳： アフリカ資本主義の形成 京都 昭和堂 1989年 196p.

---

本書の原著は1982年に著者がケント大学で行なった記念講義をもとに、83年に出版された。アイリフはアフリカ史の専門家で、『近代タンガニーカの農業変容』、『タンガニーカ近代史』などの著作がある。

本書は、1. アフリカ固有の資本主義？ 2. 資本家と農民、3. 資本家と伝道者、4. 資本家と政治家、の4章からなる。

独立後アフリカ諸国の多くは、資本主義路線を公言するよりも、むしろ「社会主義」を国是としてきた。「社会主義」の中身はさまざまであるとしても、経済運営に官尊民卑の傾向があったことは確かである。しかし、著者が日本語版序文で言っているように、80年代の経済危機と構造調整のなかで、アフリカにも経済自由化、「民営化」の波が押し寄せてきている（さらにソ連、東欧での変化がやがてアフリカにも波及するであろう）。その時にアフリカ人が危惧するのは、資本主義の発展していないアフリカで、民営化された企業の担い手がアフリカ人のなかにいるかということである。こういった文脈のなかで、本書は実践的に重要な、時

宜を得たものである。

しかし本書は本来そのような課題に答えるために書かれたのではなく、もっとアカデミックな観点から書かれており、そのようなものとして読んで、きわめて興味深い。本書の狙いはアフリカ資本主義の存在様式、歴史、特質を解明することにある。この目的に沿って、著者はアフリカ史の専門家として、研究動向を十分に踏まえ、さらにこのテーマに関連する多くのフィールド・ワークを総括的に整理している。訳者あとがきにいうように、この点が本書の意義のひとつであり、取り上げられている豊富な事例が、本書の理論的究明に幅と厚みを与えている。

翻訳は日本におけるアフリカ経済史の専門家によるものだけに安心できる。ただし人名の読み方に若干の誤りが散見される。

（児玉谷史朗）

---

宮本正興著： 文学から見たアフリカ：アフリカ人の精神史を読む 東京 第三書館 1989年

---

題名からわかるように、文学を語りながら、著者が語るのは「アフリカ」そのものである。なぜなら、アフリカ文学の名に値するものは否応なく政治的、歴史的であらざるを得ず、作品に政治、歴史、言語、部族、文化などの問題がからんでくるからである。アフリカの作家はみな、何語で書くか、誰に語りかけるか、何を書くかの決断を迫られている。

著者は敬愛するグギ・ワ・ジオンゴ論を中心に多様な作家と作品を取り上げている。アフリカ文学全体を概観するには力不足というが、読者はこの鋭いガイドによってアフリカの生々しい現実を引き込まれるにちがいない。本書は実に多くの問題を投げかけている。アフリカの問題だけでなく、日本人、日本社会のあり方を考えさせる。

著者もいうように、他民族の経験と文化価値から学ぶためにわれわれ日本人がアフリカ文学を読むとすれば、日本人、日本文学がアフリカ人読者に何を与えるかと考えるとき、はたと迷ってしまう。著者はグギに日本のいろいろな文学作品を贈ったが、彼の興味をひいたのは、小林多喜二のみだったということは重要

なポイントであろう。また日本でのAALA作家会議での「日本には民衆がない」という発言も聞き捨てにできない。

本書は著者の10年間にわたる論説や書評を収録したものである。こうしてちがった年に書かれた著作をまとめて読む場合、ある程度重複は避けられず、全体の流れがとりにくいが、その反面、ちがった局面からくり返し著者の考え方に接することができる。本書でも歯切れのいい表現で政治的、階級的に微妙なアフリカ文学者の立場、とくにグギの故国ケニアの状況を描いて見せる。著者を最も苛立たせるのは日本人の鈍感さと、文学の大前提である表現の自由がおびやかされていることへのアフリカ作家の消極的態度である。あくまで推測だがグギが長い亡命生活を余儀なくされるきっかけとなった逮捕事件は、彼の作品が体制を批判したこと、彼の母語（ギクユ語）による演劇活動が好ましくないと判断されたためであった。真実を語る人が弾圧を受ける条件がアフリカにはある。アフリカばかりでなく日本にだってある。われわれがそれに目をつぶらないためにも、著者のいうように、アフリカ文学を紹介する全国誌のようなものがほしい。（丹埜靖子）

小倉充夫： 現代アフリカへの接近 東京 三嶺書房 1989年 228p.

まえがきの冒頭にあるように「現代のアフリカは、政治、経済、社会のあらゆる領域において、解決が非常に困難な課題を抱えている」。本書はアフリカ研究者である著者が1982年から88年の間に発表した論文を編集して現代アフリカのいくつかの側面を明らかにしようとしたものである。

序章としてまとめられた「現代アフリカの動態と国際関係」を読むだけでも、アフリカの抱える個々の問題が互いに複雑に絡み合っており、解きほぐして将来への見通しを探ることの困難さがよくわかる。

第1章「経済危機の構造と対応」ではタンザニアとケニアをとり上げてその政策を対照しながら述べ、ザンビアとエチオピアについても両国の独立以前の農村社会の相違と独立後の政策とその効果について掘り下

げて論じている。第2章「都市化」と労働移動ではザンビアを例にとり実状を分析する。これは著者が現地で行なった移動労働者の面接調査で得たデータに基づいており、調査の苦心談も盛り込まれて社会学者の現地調査の一端を垣間見させてくれる。

第3章「不均等発展と国際関係」では南部アフリカをとり上げて、政治的独立とは裏腹に経済的には南アと相互依存関係にある南部アフリカの国々の実状を内陸国ザンビアとレソトについて解説する。

終章は『現代世界の地域社会——重層する実相への社会学的視座——』（北川隆吉他編 有信堂 1987年）に「アフリカ—地域の重層性と国家の相対化」として書かれたものの一部である。内部からも外部からも「国家」という概念が相対化されている現代にあってアフリカが抱える諸問題を解決するために、現実の農村社会、国家、国際的な地域の三つのレベルの関係を再構築していくことの必要性を示唆する。

現代アフリカを知るためだけでなく、これから社会学研究を志す人にとってもアフリカを事例とする絶好の書となろう。（鈴木陽子）

佐藤 誠： アフリカ協同組合論序説 日本経済評論社 1989年 302+25p.

本書は、佐藤氏が1987年にイギリスのリーズ大学に提出した博士論文の全訳である。序章、終章を除く本文7章は、協同組合の理論的考察を行なった第1章、ジンバブエを対象とした第2章から第5章、スワジランドとモザンビークをそれぞれ扱った第6章と第7章から構成されている。

レーニン等の所説の批判的検討を通じた、著者の協同組合に対する基本的な認識は、「資本主義における経済的弱者、生産手段を有しないか不十分に有する労働者、小生産者の組織」、すなわち「資本の支配に対する経済的弱者の抵抗組織」である。

この視座にたつて、まず第2章でジンバブエの1980年の独立以前の協同組合の発展を概括し、第3章以下で独立後の協同組合について、既存の研究では十分に解明されてこなかった3側面からの分析が試みられる。

第3章では、国家の協同組合政策が決して一枚岩ではなく、支配階級・階層、指導グループ内部に矛盾と対立が存在することを明らかにする。第4章では、協同組合が資本蓄積に貢献することから、資本が協同組合を通じて農民を統合しようとする過程を析出する。第5章では、農民の政治的・経済的な自覚による協同組合運動のダイナミクスを取り上げている。

このようなジンバブエでの協同組合との比較検討のために、第6章では南アフリカ共和国への従属資本主義下にあるスワジランドの協同組合の展開が、第7章では独立闘争時から協同組合運動に取り組んできたモザンビークの成果と問題点が、紹介される。

本書は、南部アフリカとくにジンバブエの協同組合を、それが抱える固有の問題に十分に配慮しながらも、単に実態の紹介に終始するのではなく、世界の帝国主義支配と民族解放運動における協同組合の担うべき歴史的使命という文脈のなかに位置づけて理解しようとした、労作である。著者の言葉を借りれば、「日本の社会科学の分野におけるアフリカ研究はこれまで大きく遅れて」おり、「借りものでない自らの哲学と的確な判断を下せる批判能力を築きあげることが、いま求められている」。(池野 旬)

---

石 弘之： 地球生態系の危機 アフリカ奥地からのレポート 東京 筑摩書房 1989年 vii, 233 p. (ちくまライブラリー 3) (ja-57-Is 1)

---

パリからダカールに向かう飛行機からサハラ砂漠を見た。所どころにオアシスと思われる黒い点が見える。ダカールに下り立つとそこは、もうサヘル地域の西端である。空港からダカールの市街に向かう道の両側には木が数えるほどしか見当たらない。お世話になったセネガル人のマンションから見えるそれほど遠くない大統領官邸が、細かな砂を含んだハルマツタンのために霞んで見える。

本書は、このサヘル地域を中心として、アフリカの旱魃をレポートしている。多くの日本人にとって、森林は伐採しても放っておけば自然に再生されると考えられていないだろうか。日本では雨は年間を通じて2000

ミリ以上降り、空地には直ぐに雑草が生えてくる。しかし砂漠化の最前線であるサヘル地域ではそのようなことは考えられない。本書では、アフリカの旱魃の原因を、自然科学的な気候変動、人口圧力に伴う人間、家畜による自然の収奪、植民地時代以降の換金作物奨励策等から分析し、さらに将来のアフリカの農業の再建築、援助の在り方等が論じられる。

自然科学的な気候変動に旱魃の主原因を求めることはもはやできないであろう。確かに微妙な気候バランスの上でサヘル地域の農業、牧畜が成立していたが、サヘル地域が維持可能な人口、家畜、農業を超えてしまったために、エネルギー源としての薪の需要が森林を消滅させ、家畜が一草たりとも残さないまでにしてしまい、乾燥地に弱い換金作物が通常の気候変動の範囲内でも雨が少ないと収穫がなくなってしまう、という事態を招いたといえるかもしれない。森林、草地が消滅すると、あとは坂道を転げ落ちるように土地は保水力を失い、農業に欠かせない表土が浸食され砂漠化が進行する。先進国の食糧援助は小麦や米で行なわれ、サヘル地域の住民の食べ物の嗜好を変えてしまったとも言われる。

しかし、本当にサヘル地域の農業に未来はないのだろうか。本書でも紹介されているナイジェリアにある熱帯農業研究所を訪ねたことがあるが、そこでの稲の実験栽培ではかなりの収量を上げていた。灌漑や施肥を含めて伝統的な農業からの脱却が、援助漬けと言われるほどのアフリカの農業の自立につながっていくだろう。

つい、数年前のアフリカの飢餓を忘れてしまいがちな現在の日本であるが、多くの人々に読んでいただきたい。(井村 進)

---

ロジャー・オモンド著、斎藤憲司訳： アパルトヘイトの制度と実態 一問一答 岩波書店 1989年 290p.+索引、参考文献40p.

---

南アフリカ共和国のアパルトヘイトは全て法律化され、その数も多く、またたびたび改訂・強化されているので、その正確な数は不明で、分類・整理すること

はむずかしい。かつてE・H・ブルックスの著作が翻訳紹介されたことがあるが(鈴木二郎訳『アパルトヘイト：文書・記録による現代南アフリカの研究』未来社 1974年)、これはアパルトヘイト法に関する文書・記録の抜粋集でその理解には法律的知識を必要とした。それに対し、本書は法律そのものではなく、南アフリカ共和国のアパルトヘイトはどうなっているのだろうかという一般の人々の疑問に一問一答の形式で答える形をとっているので、きわめて分かりやすい。

まず序説で南アフリカ史に沿ってアパルトヘイトが発生・強化されてきたことを簡潔に述べた後、人種分類、異人種間の性、集団地域、中央政治、地方政治、社会的隔離、海水浴場のアパルトヘイト、交通機関、スポーツ、教育、労働組合、ホームランド、パス法、国防、警察、刑罰、非合法団体、教会、新聞、映画・演劇、非常事態等の項目の下に、当然誰でも抱く疑問に実に細かく答えている。その結果、索莫たる法律臭は消え、アパルトヘイトの実態を実によく伝えている。

著者は南アフリカ共和国生まれで、歴史学と政治学を学んだのち、南アフリカの『デイリー・ディスパッチ』紙、ついでイギリスの『ガーディアン』紙に勤めたジャーナリストである。本書はペンギン・スペシャル叢書から*The Apartheid Handbook: A Guide to South Africa's Everyday Racial Policies*, 1985のタイトルで発表され好評をばくした。翻訳にあたっては日本の読者を考え、原書とは違い、事項別、法律別、人名別索引の他、日本語参考文献もつけ、きわめて良心的な翻訳である。(林 晃史)

松本仁一：アパルトヘイトの白人たち すずさわ書店 1989年 226p.

本書の母体となったのは朝日新聞紙上に15回にわたって連載された「追い詰められる白人たち」である。あとがきによると、著者は南アフリカ共和国のアパルトヘイトについて従来、ほとんど被抑圧者であるアフリカ人側に視点を置き、人種差別の非道さを訴えるも

のが多かったのに対し、本書は逆の視点、つまり「差別する側の論理」を掘り起こしたいと考えたのが契機になったとしている。これと同じ視点はちょうど本書と同じ時期に出版されたイギリスBBC特派員のGraham Leach, *Afrikaners*, London, MacMillan, 1989にも見られ、奇しくもアパルトヘイト問題を追求している日本とイギリスのジャーナリストによって取り上げられたことは興味深い。そして両者が南ア白人の特異性として、500万人という数の多さと「白いアフリカ人」としての強烈な民族意識を指摘している点では共通している。本書の著者は82～86年のナイロビ特派員中の南ア取材および87年の再訪時のさまざまな階層の白人たちとのインタビューをとおして白人たちの対応を生き生きと紹介している。南ア政府の政策に対し、このままでは白人支配が崩壊してしまうと政府を批判する右翼のテレブランシュAWB(アフリカーナー抵抗運動)党首、政府を批判しながらも白人の特権のうえに生活するギリシャ系移民のタクシー運転手、アパルトヘイトへの闘いに疲れ南アからの脱出<sup>エクソダス</sup>を決意したソーシャルワーカーのメリ・ヒューズ夫人、白人・黒人分離の上で白人だけの村造りをすすめるP・ブルベール氏、アパルトヘイトを続ければ南アは世界から孤立すると批判するアングロ・アメリカン社のデビア専務(のち、かれは野党PFP党首となり、現在民主党の代表の一人)、黒人に味方したため白人から村八分にあったラグビー選手など、各々の立場と意見を克明に伝えている。それに対し、リーチの著作は南ア白人のうちアフリカーナーだけに焦点をあて、その民族意識の形成の過程と現在の分裂——1969年の右翼HNP(再生国民党)の分離、82年の保守党の分離、さらに89年の民主党の結成など国民党の分裂と院外右翼AWBの活動と基盤を分析している。

デクラーク大統領が「対話路線」を打ち出し、政府がアフリカ人との協調を提唱している現在、南ア白人の今後の動きは注目され、本書もその意味できわめてタイムリーである。(林 晃史)